
純愛 ～ありがとう～

葉月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

純愛 ～ありがとう～

【Nコード】

N7447Z

【作者名】

葉月

【あらすじ】

突然お兄ちゃんができちゃったおんなのこのはなしです

家に美形がやってきた

もし、突然兄ができたらあなたはどうしますか…？
しかもそれがあからさまにもてそうなイケメンだったりしたら！！
普通の女子中学生としてはどうしたらいいんですかあつ。

時は数時間前にさかのぼります。

いつも通り学校から帰ってきてドアをあけるとお母さんと若い男
の声…。

「ほんと、唯くんはかわいいわねえ」

「いえ、そんな…ほんとありがとうございます。お母さん」

お母さんつつ！？なんで！？どうして！？どうしたの！？

おそろおそろリビングにいくと サラサラの髪に切れ長の目
やさしそうな笑顔のあたしの学校の高等部の制服をきた美少年がお
りました

「ちよっとお母さん！？どういうことよ、これは！」

「あらあ、おかえり、愛莉。今日からうちの息子になった、唯く
んよ」

！！

美形の事情（前書き）

なんかありがちな感じですね…

美形の事情

「はじめまして愛莉ちゃん。今日から山本家にお世話になる山本唯です」

「は…はじめまして。山本愛莉、城門学園中等部2年1組41番です」

「愛莉、お父さんの親友の息子さんよ。この間の地震で観光に行っていたご両親が…」

「お母さん、重い話は置いて…。オレ、この明日から城門高校の高等部に転校するんだ。よろしく　　なんで、愛莉ちゃんが泣くんだ……」

「ごめんなさい…明日からよろしくお願いしますっ」

逃げちゃった…自分の部屋に…だって、悲しすぎる

『コンコン』

ノックと同時に唯さんが入ってきた

「愛莉ちゃん、オレはね、親父とお袋が死んですごく悲しかったよ。でも、二人は一緒に死ねたんだ。せめてバラバラじゃなくてよかったと思ってる…だから、泣かないで」

「…はい」

「それで、オレ高等部1年1組なんだけど担任ってどういうひと？」

「松本先生…40歳くらいの男の先生で、社会の先生。太ってるけど、話はおもしろいです」

「そうか…。結婚してる？」

「してない、うえにはげてます」

「アラフォーで未婚で太ってて、はげ？残念な感じだなー」

「アハハ、そうですねー。松本先生はおもしろいですけど、学年主任の二階堂先生はこわいです。」

「もしかして、数学？」

「国語です」

「残念、はずれたか。じゃあ、夕食を食べに行こう。今日はカレ
ーだって」

唯さんが出ていくと部屋が少し暗くなった感じがする。明日、あ
んなかつこいい人が転校してきたら話題になるだろうな…

噂の美形の騒ぎ（前書き）

こんばんは！いまサブタイトルの付け方になやんでいます。なので
サブタイトルがめっちゃくちゃです…

噂の美形の騒ぎ

「愛莉ー！！今日一緒に登校してきた人だれよ？すごいかっこよかったですね！？」

「そーそうー！！すごく目立ってた」

朝、教室に入ると案の定にクラスの子に質問攻めにされた。

「お兄ちゃん。きのうできたの」

「！？」

さらっと爆弾発言を試してみた。みんな一瞬固まったけど次の瞬間

「えー？なにそれ！？」

「いいなーかっこいいお兄ちゃん」

「紹介してよー！」

「えーと…そろそろ来ると思うよ？ホールーム前に学校案内するっていったし」

タイミング良くドアが開いて

「愛莉ちゃんー！！」

「唯さん。クラスの子たちが　　って、え！？」

「「「「きゃー！！！！！！！！！！」」」」

やっぱり、唯さんはすごいなー。

「身長何センチですか？」

「体重は？スリーサイズも！？」

「写真撮っていいですか？」

なんか、すごい騒ぎに……案内はできないかな…

『キーンコーンコーンコーン』

予鈴だ。

「というわけで、愛莉ちゃんせっかく約束したのにごめん。またね！」

唯さんは嵐のように去っていきました。

試験

一学期中間試験もまったただ中の今日この頃……なんで試験とかあるんだろ……なくていいよね？なくなればいいのに！

試験勉強に追われて頭が壊れ気味です……とはいえ、試験も明日でおわり！おわるー！やっとなー！！

私も唯さんもずっと部屋で勉強してるのでお母さんがさみしそーです。

『コンコン』

「愛莉ちゃん、いる？」

唯さん？

「はい、どーぞー」

「夜遅くにごめんね？シャー芯あまつてない？」

「ありますよー、はい。明日は自由ですね」

「そうだね。でも、ここら辺のお店しらないんだよね……」

「案内しますよ」

「ホント？ありがとう！今度よろしく。」

試験終わりました！！英語がホント難しくて！過去形とか、現在進行形とか、わけわかんない。

学校から家に帰ってドアを開けるとお母さんと唯さんデジャウの話声

「と、いうわけで、わたし今から3泊4日で北海道旅行に行ってくるから、家と愛莉よろしくね。学校も試験休みだし大丈夫でしょ」

「わかりました。行ってらっしゃい」

「お母さん！？いきなりどうしたの？」

「友達に誘われてねー。じゃ、行ってくるね」

ハハ去っていきました。

「愛莉ちゃん、お店案内してくれるっていったよね。いまでもいい？」

「いいですよー。駅前でも行きますか？」

「うん、ありがとう。洋服がなくて困っててねー。っていうか、そろそろお兄ちゃんって呼んでほしーな」

ハイ？

「どうしてですか？」

「家族がほしいんだ…」

あ…そっか…じゃあ

「一緒に買い物いこう、唯お兄ちゃん。夕食も買わないとね」
そーいうと唯さんはうれしそうに笑った

お買い物

「唯さん、何買うんですか？」

「あれ？唯さん、に戻っちゃうのか。」

「外では。だって、似てないから、わけありですって言いふらしているようなものですよ？」

「そっか。愛莉ちゃん、ちょっとこのお店入っていい？」

いいながら唯さんは、メンズのお店に入って、Ｔシャツとパーカーとジーンズを即買いした

「試着もせずに買っていいんですか？」

「うん。愛莉ちゃん、ガソリンスタンドとファーストフード店とカラオケどこが好き？」

「…カラオケ？」

「じゃあ、バイトはカラオケにしようかな。」

「バイト、するんですか？っていうかそんな簡単に決めちゃっていいんですか？」

「決断は早いほうなんだよね。考えたって変わらないし。後で面接受けにくから夕飯任せていい？なんか買ってたね」

「いいですよ。もう買うものないなら今から言ってきてても。」

「ありがとう。お礼になんか買ってたね」

千円札を二枚を残して唯さんは去って行きました

4時間後 19時

「ただいまー、遅くなつてごめんね。…ごめん、疲れっちゃって夕食たべれそうにないから冷蔵庫入れといてくれる？」

唯さんふらついてるんですけど、だいじょうぶかな？

「それはいいんですけど、だいじょうぶですか？」

「
っ
て、
え…熱！？」

過去（前書き）

唯視点です

過去

立ち上がる…だるい……

「…ごめん、愛莉ちゃん…ちょっと部屋行くね…」

言い残して、部屋に入ってベットにたおれこむ

眠い

親父？お袋？どこいくの？ダメだよ…そっちは地震が！

ねえお願いこっちに来て！！

こっちだよ！！！！

「…ん…夢か」

「お兄ちゃん…おはよう。大丈夫？うなされてた。もう朝十一時だよ」

「愛莉ちゃん！？…コホっ…」

額に愛莉ちゃんの指が当たる。冷たい

「熱…高いね…体温計とスポーツドリンク持ってきておいたから」

「ありがとう…いつから部屋にいたの？うつっちゃうでしょ」

「大丈夫。おかゆ食べれる？」

「ごめん…お腹すいてなくて…」

「うん。ゆっくり休んでね」

そういつて愛莉ちゃんは部屋を出て行った

大きくなったな…愛莉ちゃんは覚えてないけど幼いころに何回か会ってる。オレが5歳の時に引っ越して以来会ってなかったから驚いた。オレの記憶の中では愛莉ちゃんは3歳のままだったから…

可愛かったよ？子犬っぽくて。そういうところはいまもあんま変わってないけど。

「コホ…ゴホツコホ…頭痛い…」

まずいかも。なんか熱上がってる感じがするし……39・4度？
知らないほうが良かった気がする…傷とかも見ると痛くなるじゃん！

…メール？

『お兄ちゃん、私ちよつと友達と遊んでくるね！！お大事に。お鍋にお粥があります。よかったら食べてね　愛莉』

外行ってくれるのは助かる…移したくないから

広い部屋…高校生のしかも、養子の部屋で10畳は広すぎるよね？
高校も行かせてもらってるし…バイトして返したかったんだけど…
…情けないな。

お腹すいた。お鍋にお粥？

「うわっ……クラクラする…」

立った瞬間めまいを感じて座りこむ…お粥はあきらめるか

「はぁー、ホント情けない」

体育祭！ 1

唯さんの風邪もすっかり良くなって、衣替えの季節です！！

制服も、冬服から夏服に代わって、なんか新鮮です。冬の黒…紺？色のセーラーから白いセーラー服になって気分も明るくなる！

「愛莉ー、宿題やった？」

「国語と数学はやったよ？」

試験休みは短いくせに宿題はたくさん出るんだよね

「つまり、英語はやってないんだよね？英語見せてあげるから数学うつさせて！」

「交渉成立」

ハイタッチ。親友の麻里とは苦手科目が違うから便利。

「今日、なに返されるかな？」

試験の後の授業はほとんどがテスト返し。

「英語と、数学代数、数学幾何、国？、理科？、世界史かな？あ、先生きた」

担任の田中先生は優しくすぎてみんな話を聞かずにしゃべってる。

…体育祭とか聞こえたような…一週間後！？

うちの学校の体育祭は、中1から高2まで縦割りに5チーム…唯さんと同じチームじゃん！！

「愛莉ー、うちら実行委員だったよね？」

斜め前の席の麻里が小声でいつている…そうでした…忘れてたけど、4月ごろそんなものになってました

「…そうだね」

「楽しみー」

「何が？」

「だって、ほら、みて？このプリント」

麻里と話してる間にプリントが配られたみたい…実行委員のみんなへ、昼休み203教室に来てください。実行委員長有川 直樹、

副委員長 長林 未来・山本 唯……！？

「愛莉のお兄ちゃんと初対面！」

「……転校してきて1カ月の人にできるの……？」

「できるんじゃない？二人いるし」

体育祭！ 2

「愛莉ー遅れちゃうよ。早くいこー」

「まだ早いでしょ」

麻里は実行委員会が始まるまで後15分もあるのにそんなこと言ってる

「唯さん、見てみたいんだもん」

「だもんってアナタ何歳？」

「14歳、いいから行こー！！」

無理やり引つ張られる

「わかったから、離して」

というと素直に麻里は腕から手を離れた

203教室、まだ早いのもう何人かいる

「唯さん！」

「あれ、愛莉ちゃんも実行委員だったの？」

「唯さんこそ、なんで副委員長とかやってるんですか？」

「えーと…今朝誰がやるか話し合ってた…押しつけられた」

「しつれーだな、唯っ！！俺たちはお前が適任だと思ったんだ（笑）」

遠くから声が飛んできた

「それ、押しつけっていうだろ！？」

「アハハハハ。あつ、はじめまして、愛莉の友達の小池麻里です」

「はじめまして、兄の唯です。よろしく」

「よろしくお願いしまーす！」

だんだん人が集まってきた。けっこー多い。2人×5クラス×5学年で50人だからあたりまえかな？

「じゃあそろそろはじめから」

前に出ると唯さんは話し始めた

「第一回体育祭実行委員会をはじめます。高等部1年1組山本唯

です。委員長がいないので司会やらさせてもらいます。楽しく安全な体育祭にしたいです。では、高等部二年生から順に自己紹介お願いします」

委員長、さぼりかな？うちの学校の行事は、基本高3は受験があるから雑用はしないんだよね。

「次は中2お願いします」

唯さんのよく通る声

「1組小池麻里です。よろしくお願いします」

「…同じく山本愛莉です。よろしくお願いします」
びっくりした…

「次に放送、用具、得点、会場などの係を決めます」

「なんか、唯先輩、そつないよね」

麻里が小声で言ってくる

「そうだねー、慣れてんのかな？」

「あんだけ目立ってれば慣れてもいそうだけどね」

確かに、あんまじっくり見たことないけど、少し長めの栗色の髪はさらさらで、ちょっと細いけど背は高いし顔も整い過ぎってくらい整ってる……

「愛莉ー？いくらかつこいいからってガン見しすぎ。私たち得点係の午前中の後半に決めちゃうよ」

「えっ？あ…うん、任せる」

体育祭！ 3（前書き）

学校の課題、やっと終わりました！！
ということで、すこし久しぶりに書いてみました

体育祭！ 3

体育祭当日です。

…事件は起こりました。得点版が消えたのです。

ちなみに責任者は私、山本愛莉です…あれっ？あの白い板は！？
見つかったー！！よかったー！！

でもなんであんなところに？

場所は屋上、プールに浮いています

…やっぱり、届かない。すぐく届きそうで届かない…あとちょっと…

「愛莉ちゃん！」

「え？」

バシャーン！！！！！！！！

「……………」

落ちたのは唯さんです。プール開きした後だから水はきれいとはいえ、相当冷たいはず…

「うわー！！すごい！水もしたたるイイ男？」

麻里…いつの間に…。何で、カメラとか持つてるの！？

「愛莉ちゃん、大丈夫だった？はい、得点版。ちよつと着替えてくるから。」

「はい。ありがとうございます」

「ねえ、愛莉…これやったの、中3の子だよ？気をつけてね。でも、うちその写真とってたりしてるんだけど。どう使う？」

麻里…顔が怖い…

「とりあえず、様子見で」

「そう？愛莉は優しいねー」

シュラバ

「ウザいんだよ!」

「何、妹だからって唯に付きまとってんの?」

別に付きまとってはいないんだけど…

現在、体育祭も無事終わり季節は梅雨。屋上に向かう階段で上級生5、6人に囲まれてます。

「なんか言えよ!」

背の高い女の手が振り上げられる ヤバ

バシッ

「え?」

目つきの悪い男の子がその女の手をつかんでいた。

「邪魔なんだよ」

「なによ!!後輩のくせに生意気ね!!!」

後輩?あれ?私と同じ年だ。見たことないけど…

「年上でも尊敬できない人に敬語は使わない主義なんで。それと

も腕力で俺に勝つ?」

「もういいわっ。いこっ」

……

「気をつけろよ。山本愛莉」

「え?…誰」

「河野響。じゃあな」
かわのきょう

情報屋さん

「麻里！。河野響って誰？」

餅は餅屋。情報は情報屋に、ということで麻里に聞いてみた

「河野響。14歳、4月17日生まれの牡牛座。成績は上の中。ただし校則違反、遅刻の常習犯」

へー…

「私のこと知ってたんだけど」

「そりゃ、知ってるでしょ。」

「…え？」

「それで？どうして、河野響？」

「さつき、絡まれてたの…助けてもらったから」

「それって、もしかしてこの人たち？」

見せられた写真には、さつきの5、6人の先輩が映っていた

「これってもしかして」

「そう。こないだの得点版隠した犯人。こうなったら、対策練らなきゃね！。愛莉、今日部活？」

「うん。」

実は吹奏楽部でサックスやってます。大会前だから練習が毎日のようにある。今日はソロパートをもらうためのオーディションがあるから特に遅くなる

「わかった！。対策、考えとくから。もう時間でしょ」

「ヤバイ。じゃあねっ。麻里！！」

契約？（前書き）

麻里視点です

契約？

んー。どうしょっかな。あの先輩たちやばいしアイツにたのむか！

『至急、図書館前までおいでー 麻里』

『了解 響』

ウチのがっこの図書館は広くてなんと個人スペースまである。

話し合いには都合がいい

「響、久しぶり。それで、あいつらヤバそうだったでしょ？」

「ああ」

「このままだと、愛莉危険だからねー。協力してくれるよね」

「断定で聞くなよ…」

「ふうん。じゃー、愛莉が危ない目にあってもいいの？」

「やらないとは言っていないだろ」

「ゴキョウリョク、アリガトウゴザイマス それで、今日の

帰り愛莉を送っていつてほしーんだけど」

「わかった」

契約成立。

帰り道（前書き）

土曜日なんで珍しく長いです

帰り道

「では、オーディションの結果、アルトサックスのソロパートは安達美紅さん、山本愛莉さんに決まりました。」

やったー！！！！

音楽大会のソロパートひける？

でも難しーんだよね…

しかも、一緒に弾く（事になった）美紅先輩はめちゃうくちゃうまいし…

「愛莉！」

はい？つて、河野響？なんで？

「えーと…何の御用ですか？」

「麻里に頼まれて。送れと」

「…だれを？」

「お前を」

「…麻里とはどういう関係で？」

「幼馴染」

えゝ！？

聞いてない。教えてくれたらいいのに…まあ、麻里とは中学からの友達だから仕方ないけど。でも、さっきあの時点で教えてくれてもバチはあたらないのに。

とりあえず

「送ってくれなくて、大丈夫だよ？遠いだろうし」

「さっきみたいに絡まれたらどうするんだ？それに同じ駅だから見たことないんだけど。っていうか、麻里と駅違うよね、それでどうして幼馴染？

聞いてみると

「俺が中学に入ってから引越したから。幼稚園と小学校は一緒だった」

「じゃあ、よろしくお願いします」

「ああ。行こうか」

「……」

「……」

歩き出しても会話がない！今日、初対面だよ…。

沈黙が重（く感じる）い。

「えーと…河野君は部活何に入ってるの？」

「響でいい。帰宅部だ」

「そっかー。麻里は新聞部だよ。昔から情報好きなの？」

「小学校に入る前から、先生とか親の噂話を広めてた」

…恐ろしい子…

「駅ついたな」

「ね」

うわ、電車こんでる。遅くなったから、帰宅ラッシュとかぶっちゃったかな。

「混んでるねー」

「ああ」

「ありがとね、送ってくれて」

「いや…そういえば…それ、サックス、やってるのか？」

「うん。小学生の時から習ってたんだけど、受験でブランクあいちやって。」

「大変だな。そういえば、家どこら辺？」

「駅から10分くらい？朝日公園の近く」

「あー、知ってる」

そろそろ着くかな…学校から6駅で結構近い。急行で2駅。うわー降りる人で流される。

「こっち！」

腕をひかれる

「こんな細くて…運動やったほうがいいんじゃないか？」

「非力だと言いたいのか!?」

「言ってる。こつちだよな？」

「そう、で次の角を右に曲がって…」

電線がなくなったこの道は綺麗。学校のほうは電線がすごいから響くん堂々と歩くなー。麻里と幼馴染とかすごい驚いたんだけど…。全然似てない。麻里は集団好きだけど（本人いわく、面白い）、響くんは絶対一人狼タイプだよな…

「家、ここ？」

「そう。マンションなの」

「そうなのか。じゃあな」

「うん。ありがとねー。バイバイ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7447z/>

純愛 ～ありがとう～

2012年1月14日19時49分発行